



マストドニア / *Mastodon* (1978) / ク
オード・D・シマック
夏響訳) / 早川書房
庫・10/31刊・¥360

今年で七十六歳になる、シマックの近作である。この年になるまで、ほとんど休むことなく、着実なペースで書き続けている。ただその作品が話題になることは、もう希だ。

ウイスコンシンのウイロー・ベンド、大学で考古学を教えていたエイサは、故郷の町に帰り、休暇を過ごしていた。そこに訪れる二十年前の恋人ライラ、そして、偶然知り合った宇宙人「キャットフェイス」が、彼らに与えてくれた、過去へと通じる路タイム・ロード——。二十年前の中編「大きな前庭」を思わせる、というより、舞台も設定も同じなのだから、事実上リライトといっていいいかもしれない。

本書では利権を求めての大騒動に視点を移し、いくぶん現代的に改められてはいる。ただ、マストドニアへの憧憬という結末は、やはり、昔ながらのシマックだろう。

シマックだから許せる、彼だからこれでいい——だが、こう書いて、もしこの本からシマックを読みはじめる八〇年代の読者はどう思うのか、などと考えると、寂しいけれども、やはり忘れられた、古きよき五〇年代の作家にすぎない、と感じてしまうのだ。(俊)